



横浜国立大学大学院国際社会科学部研究科教授
(前沖縄総合事務局開発建設部長)

池田 龍彦

沖縄在勤の思い出

だが琉球民謡に詳しい山城清臣用地課長の助言もあり、ゆったりした曲と歌詞が気に入った登川誠仁さんの「豊節」に決めました。大会まであと五十日、それまで二度も聞いたことがなかった「豊節」を果たして歌えるようになるのか、厳しい特訓が始まりました。

練習の過程でたくさんの方々の応援を受けました。総監督兼三線は山城清臣さん、マネージャー兼三線は管理課の與那嶺勉さん、

平成十一年四月に沖縄尚学高校の全国優勝と同時に沖縄に赴任し、一年三月と短い期間でしたが道路・港湾・空港・ダム・国営公園・官庁営繕と広い範囲にわたる仕事に、サミット関連の事業が加わり、忙しい日々を過ごしました。この間、数多くの方々にお世話になり、充実した生活を送ることができました。心より厚くお礼申し上げます。

沖縄での思い出のなかで、昨年十二月の「イチヤリハチーデー」JAL琉球民謡大会は特に心に残るものがあります。十月初めに出場の名指を受け、どうしようかと戸惑いまし

歌唱指導兼お囃子は新垣末子さん、更に用地課・管理課をはじめとする開発建設部のたくさんの方々の皆さんが、仕事を終えた後用地課会議室に集まり賑やかに特訓です。琉球民謡は歌三線ではなくてはと思い、一度は三線を手に取りましたが、チンタミ(調弦)から始めてではこの期間にはとつて不可能で、歌一本に集中しました。夕方五時半からの練習に加え早朝特訓、自宅に帰ってからはテープを聞きながらの食事など「豊節」二色の日々が続きました。難しかったのはウチナーグチで少し気を許すとママトグチが出てしま

います。山城監督は大変厳しく、少しでもママトグチが入ると最初からやり直します。おかげでウチナーグチに慣れて、式典の挨拶でも一部ウチナーグチで入ったチができるようになりました。よかつたのはお囃子の新垣さんの存在で、時として音が外れそうになる私の音階を、お囃子と一緒に歌うことで確実に元に戻してくれました。最初はとうなることかと心配していましたが、次第に歌らしくなっていく、リハーサルでは局長・次長はじめたくさんの方々に聞いてもらいました。何回も歌ううちに泡盛を五杯以上飲むと声が出てくることも知りました。衣裳は紺の琉球紬の模様で、沖縄芝居の吉田妙子さんが見立ててくれました。だが採寸してびっくり。結局二反も必要で、縫い手のおばあさんは大変だったということです。

大会は出場者が十五人、すべて沖縄県以外の出身者です。それぞれの応援席が丸テーブルで設けられ、超満員の結婚式の披露宴のよう、熱気にあふれた三時間半でした。コマーシャルを入れて九十分、まとめた正月の放送では伝わらないくらい盛り上がりを見せました。私の出番は十番目、

始まって二時間以上たって



ましたが、泡盛は控えめに二杯半しか飲んでいません。三線には名手喜舎場正秀さん、お囃子に大城利江さんも加わってくれて、ステージは六人です。大声援に送られてステージに上がりました。出だしの一番は私の声の調子が今ひとつの感がありましたが、会場で二番の応援をバクに次第に調子がよくなっていくのが感じられ、気持ちよく歌うことができました。運良く優勝の栄冠と副賞の古酒五升入りの瓶・航空券をいただきました。この瓶はその後四回空になり、離任する前に満タンにして四階特別会議室に置いてあります。連帯感と皆の持つ温かい気持ちを感じた五十日間でしたが、沖縄で仕事・生活をしていて、多くの方々とさまざまな局面でこれと同じような感情を持つことができました。これらは、私の沖縄での生活を豊かにするとともに私のものの見方に更にふくらみを持たせてくれた感じがします。たくさんの方々との出会いを大切に胸にしまい、これからも沖縄を想っていきたくと考えています。沖縄県年毎繁盛不衰り御願ひさびら。

にへーでびる。